OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	histoire de + 不定詞構文について : une histoire de ≪ histoire de ≫
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72754
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

histoire de + 不定詞構文について

— une histoire de « histoire de » —

春木　仁孝

1. はじめに

現代フランス語においては名詞が文法化によって機能語化するという現象が多々見られる。筆者は春木(2016)において côté, façon, style, genre など代表的な例についての考察を行なった。その際、やや形式は異なるもののやはり文法化を経て前置詞的な機能語になっている histoire de という表現についても取り上げた。しかし紙幅の関係もありこの表現の文法化の側面について見ただけであった。本稿はそのときの考察を補足し、そこでは触れなかったことも含めてさらにこの表現について検討することを目的にしている。

先ず＜histoire de＋不定詞＞という構文の機能を簡単に説明しておく。この構文は目的を表わすとされる。実際、仏々辞書を見てみると、Le Petit Robert では marque le but, l'intention「目的、意図を表わす」とあり、また Le Trésor de la langue française informatisé では説明として単に pour, afin de と目的を表わす最も一般的な前置詞句が書かれているだけである。一方、Larousse のオンライン辞書では à seule fin de と説明されている。仏和辞書を見ると小学館ロベール仏和大辞典およびロワイヤル仏和中辞典ではともに「ただ…するために」と説明されている。実際、用例を見ていくと Larousse 辞書にある seul や日本語の「ただ」から分かるように、何か他により重要な目的、意図がある訳ではなく、「ちょっと…のためだけに」ある行為を行なったというようなニュアンスを持っている場合が多い[1]。Trésor の説明にあるように pour や afin de と置き換えても一見ほとんど違いがないのではないかと思われる例も確かに存在するが、本稿では histoire de は pour や afin de とは異なる働きがあるという立場にたってこの表現の特性について考察していく。

先ずは考察の対象となる histoire de＋不定詞構文の典型的な例を一つ挙げておく。

(1) Tu es dans le métro, *histoire de* te réchauffer et *de* voir comment ça se passe là-dedans, tu n'as pas vraiment de projet, tu veux juste rester au chaud.[2]

(Raphaël Haroche, *Retourner à la mer*. 2017, folio 6520：144)

登場人物は地下鉄に乗っているのだが、普通なら地下鉄に乗るのはどこか特定の場所に行くという目的があって乗るのである。しかし、登場人物はどこかに行きたいわけではなく、単に暖まりたいのと地下鉄の中はどんな感じかなという気持ちで乗っている。つまりある行為にふさわしい目的、釣り合う目的ではなく、より軽い特に必然性のない目的を histoire de は導入しているのである。この例では、その次の文で tu n'as pas vraiment de projet, tu veux juste rester au chaud.「特に何か計画があるわけではない、暖かい場所にいたいだけ

---

1 筆者が見た中で最も踏み込んだ解釈を与えているのは Dictionnaire du français langue étrangère の Niveau 2 にある「just pour と同義で、あまり重要でない意図、目的を導入する」という説明である。

2 このテキストではホームレスの男性の行動と気持ちを 2 人称の tu を用いてあたかも第 3 者、もしくは本人が観察しているかのように表現している。

である」とさらに説明されているが、histoire de が導き入れている部分だけでも既にそのような意味あいは十分に示されているのである。

一般に目的を表わす不定詞を導入するために用いられるのは、afin de や pour、あるいは dans le but de などの前置詞（句）であるが、(1)の例にある histoire de はこれらの前置詞（句）とはその働きが違うのである。

2. histoire de＋不定詞構文の文法化の過程

春木(2016)でも紹介したが、Legallois(2012)による histoire de の起源とその文法化の過程を簡単に記しておく。Legallois(2012)は構文文法の観点から histoire de について考察しているが、Frantext を用いた彼の調査によれば、この表現の初出例は 1830 年代であり、その後徐々に用例が増え、1980 年代から飛躍的に使用例が増加する。Legallois は、この表現の出発点は不定詞ではなく名詞を従える以下のような表現だと考えている。

(2) C'est *l'histoire de* quelques livres.

（それは数冊の本があれば／を買えば／を読めば／...よいだけのことだ。）[3]

この表現は、行為に要する時間や行為の遂行は大したことではないという意味を持っていた。そして語用論的推論により行為自体も大して重要ではないという解釈を持つようになる。一方で、C'est l'histoire de rire.「それは大したことではない／冗談だ」という別の慣用表現の影響で不定詞を導入する形が現われ、元々は先行発話で述べられている事態に対する評価を表わしていたものが、先行発話で述べられている事態の動機、つまり目的の解釈に移行していった。そして、時間と共に前置詞句と再解釈され、先行の発話と融合した＜histoire de＋不定詞＞という表現が成立した。動詞は圧倒的に rire「笑う」が多かったが次第に用いられる動詞も増えた。しかし rigoler「笑う」、passer le temps「時を過ごす」、dire「言う」、causer「おしゃべりをする」、manger「食べる」、prendre l'aire「気分を変える」等、目的としてはあまり重要ではない行為を表わす動詞が多かった。また s'égayer *un peu*「ちょっと気晴らしをする」、gagner *quelques* mètres「数メートルかせぐ」、causer *un instant*「しばしおしゃべりをする」のように程度の低さを表わす表現が共起することが多い。構文そのものが不定詞が表わす行為は重要性を持たないというニュアンスを持つため、同じく目的を表わす afin de や pour, dans le but de などと違い、一見重要な意味を持つ不定詞が用いられても行為の重要性が緩和される。また、本来の目的という意味が持つ意図性と histoire de が導入する不定詞部分が意図的な行為でない場合に意味の衝突が起こり、時に皮肉としての解釈になる。いわゆる構文による意味に対する強制 coercion が起こるのである。これが Legallois(2012)によるこの表現の文法化の過程である。

3. 実例の検討

先ずは(1)と同様に大した目的ではないことがよく分かる例を見てみよう。

---

[3] 興味深いことに日本語でも「...すればよいだけの話だ」のように「話」という表現を用いることができる。

(3) Il retourna s'asseoir à sa place. De nouveau c'était le grand calme, le silence complet. Face à ce vide qui nous retombait dessus, je lâchai, *histoire de* lui dire quelque chose :

—C'est calme.

—Fallait venir y a huit jours, c'était autre chose !

(Serge Joncour, *L'écrivain national*. 2014, Flammarion : 136)

(4) En revenant je m'étais arrêté au café du Chêne à Marzy, en face de l'église, *histoire de* prendre un sandwich, et là j'étais tombé sur le fameux Pierrot, je lui avais proposé un cognac, et il s'était mis à me parler de tout, (...).

(Serge Joncour, *L'écrivain national*. 2014, Flammarion : 90)

(5) Au bout d'un moment, un rayon de soleil s'est faufilé dans les feuilles. J'ai déballé les sandwichs sans me presser, *histoire de* me rendre utile. Je voulais éviter de m'endormir sur place. (Philippe Djian, *37° 2 le matin.* 1985, J'ai lu 1951 : 269)

(6) —Dis-moi, Franck, tu fais quelque chose pour le déjeuner ? Ça fait longtemps que je veux te proposer qu'on mange ensemble, *histoire de* prendre le temps de discuter un peu...

(Raphaëlle Giordano, *Ta deuxième vie commence quand tu comprends que tu n'en as qu'une*. 2015, Eyrolles : 115)

(7) (貧しくて、石炭がなくなると森に燃料とする枝を拾いに行った話) Pour ne pas avoir à subir la honte, ma mère en faisait un jeu. Nous savions que c'était la pauvreté, le manque d'argent, les enfants comprennent ça plus vite qu'on ne peut l'imaginer. Ma mère disait *On va aller ramasser du bois,* histoire de *faire une petite promenade, au moins on va bien se marrer.*

(Édouard Louis, *En finir avec Eddy Bellegueule*. 2015, points 4092 : 85)

(3)はまさに沈黙を破るためにとりあえず「静かだね」と言ってみたわけで、天気についての言葉でも何でも良かったのである。これも histoire de の典型的な例と言える。(4)はたまたまサンドイッチを食べるために広場のカフェに入ったところ、偶然 Pierrot に会っていろいろと知りたかったことが聞けたのだが、最初からそのようなことを目論んでいたのではないのである。(5)は友人と釣りに来ていて、友人が釣りのやり方を見せてやるというので木陰に座って友人の様子を見ている場面である。眠ってしまいそうなので何か自分も役に立つことをしようと、何かすることを捜して持ってきたサンドイッチの包装を外しているのである。(6)では同僚を昼ご飯に誘っているが、特に決まった用があるわけではなく一度ちょっと話しをするのもいいだろうという感じである。だからずっとそう思いながらやっと誘ったのである。(7) は特に興味深い例である。薪を拾うのに別に口実はいらないし、薪を拾うことと散歩をすることの部分の関係を考えると、行為と目的はむしろ逆になっているとも言える。つまり薪を拾うのは散歩をする時にたまたま拾えるのでと、散歩を主にし

て薪拾いを従になるように表現して、ちょっとついでにする行為のように母親は思わせようとしているのである

4. histoire de＋不定詞構文の持つニュアンス

histoire de によって導入される目的は先行する行為の説明、先行する行為の動機を付加的に表わしているのであるが、その説明・動機付けというのは「急いで一応説明しておくけれど」とか、「まあ、特に深い理由はないのだけど」のようなニュアンスを持っている。また、同時に個人的な理由という側面もある。つまり histoire de によって導入される行為は、先行する行為を当事者なりに正当化するために導入されているのである。

春木(2016)では Legallois(2012)から histoire de の文法化の過程についての説明を紹介しただけに終わっているが、実は Legallois は histoire de を expressive grammatical form の格好の例として論じている。彼は expressive or affective syntax という言葉も用いているが、表現的文法形式というのは vivacity と vividness を表わす要素であり、そのようなモードにおいては状況が視覚・聴覚・触覚などを通して捉えられ、その状況が具体的・知覚的になり眼前効果を持つと説明されている。histoire de はまさにそのような要素であり、発話者の主観的な態度が示されているというのが Legallois の主張である。彼は Charles Bally の le mode vécu (the experienced mode)と le mode pur (the pure mode)の区別に言及して、この le mode vécu が言語における表現性を重要視した先駆けであると紹介している[4]。この Bally の二つのモードは、春木(2012)などで取り上げた I モード、D モードのという事態把握の方策とも密接に関連するものであると思われる。I モードとは事態を身体的インタラクションを通して把握するモードのことであり、まさに主観性や表現性がそこに現われる。ただ Legallois の言う表現性と、我々の考える I モード的事態把握とは必ずしも同じものではないようにも思われる。たとえば Legallois は以下の様な例を用いてこう説明している。

(8) Tu arrêteras aux Boulevards, *histoire de* prendre un pot...
'You will stop at the Boulevards, just to have a drink'

(9) Tu arrêteras aux Boulevards, *pour* / *afin de* prendre un pot...
'You will stop at the Boulevards, to / in order to have a drink'

(9)は発話者の態度に関しては中立的で、主観性は表現されていないと言う。これに対して(8)は発話者の主観的な態度が表現されていて、発話者の意図は「ちょっと何かを飲む」ということに限定されていて大通りで止まるということにそれ以外の理由はないということを示していると言う。histoire de の意味は「先行の行為は意図が限定された（従ってあまり重要性のない）目的に動機づけられている」というものであり、それに加えて目的として導入されている行為に対する発話者の表現的で主観的な態度が示されている。その態度は発話者が先行の行為の正当化から距離を置いていることによる[5]。以上が Legallois の説

[4] Bally の原典にあたる余裕がなかったので、もっぱら Legallois の説明によっていることをお断りしておく。

[5] Legallois のこの説明には少し違和感を覚える。先行の行為の正当化から距離を置いている(detachment)というのは、

明である。pour や afin de を用いても(9)のように軽い目的を表わすことはできるが、その場合でもそこには発話者の主観的な態度は表現されていないのである。一方、histoire de は先ず重要でない目的を表わし、なおかつ発話者の主観的な態度が示されているというのである。このように Legallois はあくまでも表現性というのは意味に加えて示されるものという捉え方をしているようである。

5. histoire という語の意味

ここで histoire という語が持つ意味の特性について考えてみたい。Legallois が histoire de の文法化の出発点としてあげた名詞を導入する (2) のような例では、行為を特定化する不定詞はないがいずれにしろ、先行の行為は数冊の本に関して何かをすれば済むことだという評価を表わしていたのであり、いわば先行の行為と histoire de が導入する名詞に関する何らかの行為が同じようなものだと述べていた。一方、文法化のもう一つの源泉になった C'est une histoire de rire.「それは笑うべきことだ、冗談だ」という成句は、先行の行為は笑いの対象と評価できるということだと述べている。文法化が進むにつれて評価が次第に動機付け、主観的な正当化へとシフトしていくが、いずれにしろ histoire という語を通して先行の行為と histoire de によって導入される行為とが関係づけられるという点では同じである。そしてそれが可能なのは、この histoire という語が、question などと同様に実際の内容がそれぞれの状況によって満たされるという性質を持つ語であるからこそなのであると考えられる。histoire という語の本来の使われ方を少し思い出しておこう。

(11) C'est une longue histoire.「話せばいろいろあるんだ」

(12) C'est une autre histoire.「それはまた別のことになるんだ」

(13) Tout ça, c'est des hitoires.「そんなことはみんなでたらめだ」

(14) Il a été viré pour une histoire de femme.「あいつは女性問題で首になった」

(15) Ne fais pas d'histoires. D'accord ou pas d'accord ?
「ぐだぐだ言うのはやめろ、オーケーなのかだめなのか」

(16) Tu ne vas pas en faire une histoire !「大げさに騒ぐのはやめてくれ」

(17) J'aime pas avoir des histoires avec le directeur.「部長ともめたくないんだ」

これらの例では histoire は「問題、出来事、嘘、もめ事、大騒ぎ」などのように言い換えることができるが、結局は具体的な説明はせずに何らかの内容を暗示しているだけである。つまり具体的な内容を言語上は表現していない点に特徴がある。具体的に説明をしていない、つまりはっきり言わないというところから、多くの場合にネガティブな印象を与える。この多くの場合、histoire がマイナス評価を持つという点は、histoire de が重要ではない行為を主観的な動機付けとして導入するということとつながるのではないかと筆者は考える。

行為の正当化をあまり重視していないという意味かと思われるが、著者の考えでは histoire de で導入される行為は客観的、あるいは世間的に見て先行の行為の正当化にはならないかもしれないが、少なくとも発話者の気持ちとしてはそれで十分正当化されるのであり、発話者にとっては十全な動機付けと考えられおり（だからこそ主観的と言えるのであり）、正当化から距離をおいているという説明は誤解を与える恐れのある説明である。

いずれにしろ、具体的な内容を表示しない histoire という語を通して先行の行為 A と histoire de によって導入される行為 B とがいわば融合されて結びづけられることで、主観的な正当化という操作が行なわれるのである。

6. その他の問題について

6.1. 皮肉的な解釈について

Legallois の説明の中に導入される不定詞部分に意図性がなく、目的が含意する意図性との衝突で皮肉のニュアンスが出る場合があると記したが、実例を見ておく。(18)は Legallois が挙げている例であり、(19)(20)は筆者の採取したものである。

(18) Je saute du plume, me cogne le petit orteil au pied de la table, *histoire de* commencer la journée par une douleur.
(Lasaygues, *Vache noire, hannetons*, cité dans Legallois 2012)

(19) Le lendemain, j'ai accompagné Jasmine à l'aéroport, *histoire de* boire ma défaite jusqu'à la lie, ou l'hallali, je ne sais pas.
(Marie-Sabine Roger, *Trente-six chandelles*. 2014, Édition de Rouergue：194)

(20)（土砂降りの中を運転している）Mes yeux essayaient vainement de déchiffrer les panneaux, tandis que la bande de dieux, là-haut, s'en donnaient à cœur joie en jetant un maximum de buée sur mes vitres, *histoire de* corser mon désarroi.
(Raphaëlle Giordano, *Ta deuxième vie commence quand tu comprends que tu n'en as qu'une*. 2015, Eyrolles：7)

(18)ではベッドから飛び起きた拍子に足の小指をテーブルの脚にぶつけてしまったのであり、わざわざ「一日を痛い思いで始めるために」足の小指をぶつけたのではない。むしろそれは結果と考えられるが、histoire de で導入されることによって皮肉のニュアンスが出る。(19)は恋人の Jasmine がニューヨークで新しいことに挑戦するので一緒に来ないかと誘われた主人公がそれを断ったが彼女の出発を見送りに行くという話である。自分の不幸の澱まで飲み干すというのは(18)と同様に意図的な行為ではなくむしろ「そういうことになるが」、といったニュアンスである。(20)も雨は自然現象でありそのためにフロントガラスが曇って道路の標示が見えないのは誰のせいでもないが、それがまるで主人公を困らせるための意図的な行為であるかのように表現することでやはり皮肉のニュアンスが出ている。

6.2. 位置について

この構文は＜行為 A、histoire de ...＞という形式が標準的ではあるが、目的の軽さが明白な場合は文頭に置かれる場合もある。

(22) *Histoire de* bouger un peu, j'ai rassemblé les affaires de Betty et je les ai pliés soigneusement. (Philippe Djian, *37°2 le matin.* 1985, J'ai lu 1951：236)

また、先行の行為を表わす発話を一端終えた後に、新たな発話として histoire de が続く場合があるが、その場合は histoire de＋不定詞構文の付加的な性格がより明確になる。

(23) Ils nous ont emmenés dans leur bureau et style comme s'ils étaient des keufs, le droit de tout faire, ils nous ont dit de baisser nos joggings, exprès pour nous emmerder. *Juste histoire de* nous fouiller. （註：keuf = flic）

(Thierry Jonquet, *La vie de ma mère !* 1994, folio 3585：43)

6.3. histoire que

不定詞を従える多くの前置詞句と同様に、補文を従える形も存在する。この場合、補文の動詞は接続法に置かれる。働きについては不定詞を従える場合と何ら違いはない。

(24) — Tu as fait beaucoup de progrès en lecture, elle m'a dit. J'espère que tu vas t'accrocher ! (...).

— N'est-ce pas que tu vas t'accrocher ? elle a insisté, mademoiselle Dambre.

J'ai fait ouais ouais, *histoire qu'elle me foute la paix*.

(Thierry Jonquet, *La vie de ma mère !* 1994, folio 3585：39)

(25) — Après je vais cogner Ludo.

— Tu l'as déjà cogné l'été dernier.

— Ouais, mais il paraît qu'il a la haine après moi, il s'est entraîné et tout...

— Ah ouais !

— Ouais, des gars l'ont vu taper un arbre qu'il appelait comme moi... Je vais lui remettre une raclée, *histoire qu'il comprenne la vie et qu'il respecte la nature*.

(Samuel Benchetrit, *Chroniques de l'asphalte* 3/5. 2010, Grasset：87)

7. 新しいディスコースマーカーの誕生

春木(2016)でも紹介したように、histoire de＋不定詞構文の発展形として、不定詞を従えることなく副詞的に発話末に現われる histoire de や juste histoire comme ça という形も話し言葉では見られる。Legallois が挙げる(26)の histoire de は juste histoire comme ça で置き換えることができる。(28)(29)はネットからの採取例である。

(26) Il attendit pour voir si un con en treillis rirait de son esprit. Il lui aurait fait faire une petite marche de nuit, *histoire de*.

(Vautrin, *Bloody Mary* cité dans Legallois 2012)

(He waited in order to see if an idiot in combat fatigues would laugh at his wit. He would have obliged him to have a little night march, *just like that*.)

（彼は軍服姿の馬鹿が彼の機知を笑うかどうか待った。彼はそいつにちょっと夜の行進でもさせないといけないんじゃないかと思っていた。たとえばだが。）[6]

(27)（主人公の母親は病死、その後父親は失踪。養女としてエルザに育てられる。出生地の役所に父親の消息を尋ねる手紙を送って返事をもらったが読んでいない。エルザに手紙のことを聞かれて出生地にとりあえず行ってみると言う。）

---

6 少し分かりにくい例なので、Legallois の英訳と日本語の試訳をつけておく。

Un jour Elsa se décide. Et la lettre ? Tu ne l'as pas lue ? Je ne dis ni oui ni non, je déclare que je vais faire un tour là-bas. *Histoire de*. Question de savoir.

(Annie Saumont, *La terre est à nous*. 2009, Juillard：25)

この例の histoire de は「とにかく、とりあえず」などと訳せるが、興味深いことに直後に question de savoir「一応どんな感じか知るために」とある。ここは histoire de savoir と言ってもほぼ同じ意味だが、histoire de は独立の一つのマーカーとして用いられ、histoire de とほぼ同じような働きをする question de+不定詞を用いて内容を補っていると考えられる。

(28) C'est navrant, c'est incompréhensible, c'est regrettable. Je me permets de mettre un lien vers ton billet sur la page FB de mon blog, *juste histoire comme ça*, de le dire, de le faire savoir, et de regretter cette curieuse décision.

これはあるブックフェアに参加する地方出版社が提案した作家の招待が運営組織から拒否されたことに対するネット上の議論で、ある人が自分のブログにリンクを張ってそのことを広く知らせたいと述べているものである。juste histoire comme ça「とりあえず、とにかく」で終えても成立するが、この例ではさらに不定詞を補っている。

(29) Je me posais une petite question. J'aurais voulu savoir combien il y avait d'agences bancaires en France. Combien il y avait de contribuables payants l'ISF. Pour connaître le ratio suivant：contribuables à l'isf / agences bancaires. *Juste histoire comme ça*. Si vous avez des infos ça m'intéresse. （註：ISF=富裕税）

この例では Juste histoire comme ça はその前 pour で目的を表わしている部分にかぶさって、単にそれを知りたいだけだと確認していて、「それだけのことだが」とか「深い意味はないのだが」のように訳せるかと思われる。

次の例は不定詞はあるものの、目的という意味はほぼ無くなっている興味深い例である。

(30) Pourtant même lui, de voir le papier peint tout nu sur les murs, presque neuf du coup parce que jamais altéré ni par la lumière ni par la fumée, disait qu'elle faisait plus grande comme ça, sa chambre. *Histoire de dire*：sa chambre.

(Laurent Mauvignier, *Loin d'eux*. 1999, Les Éditions de minuit：15)

映画好きの息子が部屋中に貼っていた映画のポスターと共にパリに行ってしまった後の部屋を見て父親がつぶやいている場面である。もう息子の部屋ではないのだが「言ってみただけだけど、あいつの部屋って。」とでも訳せばいいだろうか。前の文で sa chambre と言ったことに対する言い訳のようになっている例である。

いずれにしろ question de+不定詞その他で不定詞部分を追加的に補ったり、pour で導かれる目的説にニュアンスを付け加えたり、「ただ単に」というような言い訳（＝自己正当化）を導入したりというような用法が発達しつつあるのを見ると、histoire de＋不定詞という構文から histoire de あるいは juste histoire comme ça という新しいディスコースマーカーが成立しつつあることが分かる。

本来、histoire de＋不定詞構文は重要でない目的、個人的な正当化、動機付けを導入する

という働きをしていた。そこから、上で見たようなディコースマーカー的な働きへの文法化はどのように進んできたのだろうか。重要でない目的を導入するというのは、「特に理由はないがまあしいて言えば…のために」のようなニュアンスであり、場合によっては特に理由はない行為に対していわば口実を与える、あるいは一応かっこうを付けるために理由を述べるために histoire de＋不定詞が用いられているのである。皮肉のニュアンスの例(18)でも、まさかそんなつもりではなかったがまるで「一日を痛い思いで始めるため」でもあるかのようにわざと足の指をぶつけたみたいだと言っているのである。薪を拾いに行く例(7)はまさにかっこうをつけるためにわざとらしい理由付けをおこなっている。結局、極端な場合には不定詞部分はなくてもいいぐらいに軽いのである。さらにブリーチングによって目的といったニュアンスは消えて例(30)のように「言ってみただけだが」のような用法が現われ、さらに不定詞部分のない「まあ、とりあえず」とか「とにかく」、「一応」といったニュアンスを表わすディスコースマーカーが発達してきたと考えられる。

8. まとめ

本稿では春木(2016)では触れることのできなかった histoire de＋不定詞構文の諸問題を見ると共に、afin de や pour、dans le but de といった目的を表わす不定詞を導入するいわば中立的な構文に比較して、histoire de +不定詞構文は先行の行為に対して発話者が自らの視点から見てたとえ個人的であっても発話主体にとっては十分な動機付け、言い換えれば正当化として成立する行為を導入する構文であるという立場から検討を加えた。Legallois (2012)ではこの構文を、表現的な構文の格好の例であると分析していた。筆者は、春木(2011)(2012)などで展開したフランス語と認知モードの考えの上に立って、この構文をＩモード的な構文であると考えたい。Ｉモードとは、事態を身体的インストラクションを通して認知して表現するモードのことである。これに対する D モードというのは事態を外からメタ的に認知して表現するモードのことである。従ってＩモード認知というのは発話主体の五感を通して認知することに他ならず、主観的で表現的に事態は言語化されることになる。主観的・表現的というのはあくまでも発話主体が事態をそう捉えているということであり、事態を客観的、あるいはメタ的に捉えて言語化した場合と言語表現は異なってくる。histoire de の場合も、発話主体が先行の行為の動機付けと捉えていればそれだけで表現は成立するのであり、先行の行為に対して histoire de が導入する行為が目的、ひいては動機付けとしてのつながりが客観的には弱くとも、全く問題はないのである。また(18)-(20)で見たように、不定詞部分が意図性を持たない場合でも用いることができるのである。

また pour や afin de を用いても成立すると思われる場合であっても、histoire de が用いられているということは認知主体の主観的なフィルターを通して捉えられているのであり、客観的・中立的な表現ではないのである。たとえば次の例で考えてみよう。

(31) C’est Samuel qui va chercher l’eau s’il faut en faire bouillir, mais c’est Sibylle qui s’occupe du reste. Les pâtes de fruits, les barres énergétiques, les plats

déshydratés, le chocolat forment à peu près le menu quotidien, qu'on accompagne de thé et de gâteaux au sésame, *histoire de* tenir.

(Laurent Mauvignier, *Continuer*. 2016, Les éditions de minuit：98)

フランス人の母親と10代の息子が人生を見つめ直すために中央アジアを馬で旅している話である。毎日の食事の内容が書かれている。栄養を取りエネルギーを保つための最低限の食事であり、毎日ほぼ同じ単調な食事をしている。食事の内容が列挙された最後に histoire de tenir「頑張るために（＝頑張って旅を続けるために)」とある。この文では目的を表わすのに pour や afin de を使っても言える。ただそうすると、客観的な事実の描写になってしまう。histoire de tenir と書くことで、食事は単調で量や味も十分ではないが旅を続けるためには仕方がないのだ、そのためにこういう食事を取っているのだというニュアンスが伝わる。この文の出だしで c'est Sibylle qui s'occupe du reste とあるが、その部分も含めてここで聞こえて来るのは母 Sibylle の声である。この部分は書き手や第3者の視点のように見えながら、結局は作中人物の視点で書かれているのである。

(32) (...) depuis qu'elle a pris la décision de partir, elle fume trois cigarettes maximum, *histoire de* ne pas encombrer ni ses bronches ni ses bagages.

(Laurent Mauvignier, *Continuer*. 2016, Les éditions de minuit：107)

同じ小説からの(32)も Sibylle を3人称代名詞 elle で表わしながらも気管支のためにもまた荷物を増やさないためにも1日の煙草は3本と決めたという部分は明らかに Sibylle の視点から述べられている。喉と荷物のことを考えれば禁煙すればいいのであり、3本という制限になんら客観的な根拠はなく、あくまでも自分なりの妥協による正当化を表わしている。

このように、histoire de＋不定詞構文は認知主体が自らの視点で先行する行為に対して正当化として成立すると考える動機付けを目的の形で導入するときに用いられる I モード的な事態認知を担う構文である。「他により重要な目的、意図がある訳ではなく」という説明をしたが、これは認知主体の立場からの個人的な正当化、動機付けからいわば結果的にそうなることが多いということである。

[参考文献]

春木仁孝(2011) 「フランス語の認知モードについて」『言語における時空をめぐって』IX, pp.61-70. 言語文化共同研究プロジェクト 2010, 大阪大学大学院言語文化研究科.

春木仁孝(2012) 「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化研究』38, pp.45-65. 大阪大学大学院言語文化研究科.

春木仁孝(2016) 「話し言葉における名詞の機能語化について－côté, question, façon, genre, style, histoire de, etc.－」『フランス語学の最前線』第4巻, pp.85-125. ひつじ書房.

Legallois, Dominique. (2012) "From grammaticalization to expressive constructions：The case of *histoire de + inf.*" Myriam Bouveret and Dominique Legallois. (eds) *Constructions in French*, pp.257- 281. Amsterdam / Philadelphia, John Benjamins.